

「5打数5安打」

2025 02

イチローが大リーグの野球殿堂入りした。日本人選手として初めての快挙らしい…。

彼は51歳、我らが奈緒ちゃんと同じ年だ。

障がいがあり、長くは生きれないと言われた奈緒ちゃんを50年にわたり撮り続けた「奈緒ちゃんシリーズ」にも、自慢したい快挙の連絡が入った。「奈緒ちゃんシリーズ」第5作『大好き～奈緒ちゃんとお母さんの50年～』がキネ旬報ベストテン（以下 キネ旬ベストテン）に入賞、第1作から5作まで全て入賞という、シリーズ作で劇映画も含めて他に例のない快挙らしい。

1995年『奈緒ちゃん』	第2位
2002年『びぐれっと』	第8位
2006年『ありがとう』	第5位
2017年『やさしくなめに』	第3位
2024年『大好き』	第6位

もちろん、賞を取るために映画を創っているわけではない。「奈緒ちゃんシリーズ」はもともと、奈緒ちゃんを励まし、奈緒ちゃんの家族を励まそうという思いでカメラを回し始めたホームムービーのような映画だ。

それが気が付いたら50年近くの記録になっていった、というシリーズ作品だからね。

でも、多くの映画人がキネ旬ベストテンに入ることを、ひとつの目標にしている中で、シリーズ5作が全て入賞というのはたいしたものだ。5打数5安打はイチロー並み、というかオオタニ君並みというべきか、自慢していいと周りの皆におだてられた。

自分自身が、ちょっと自慢してもいいかな…と思うのは、映画生活51年で、30本に及ぶ長編映画を創り続け、そのほとんどが自主製作・自主上映で創られた、ということだ。

つまりスポンサーやテレビ局の制作資金で創られたのではなく自力で創り、上映も配給会社にゆだねるのではなく自力で上映先を開拓し、観てもらおう活動に取り組んできたのだ。もちろん、多くの方々の力を借りて、迷惑を目一杯かけ続けたことだけど…。

「奈緒ちゃんシリーズ」だけでなく、他の作品も多くの賞を頂いてきた。30作に及ぶ作品を遺すことが出来て、同時に多くの借財をも遺してしまっている。

あと何年生き、何作映画を創ることができるかわカラナイけど、命ある限り創り続けようと思う。ボロボロになってもね…。借財を返さなければということもあるし、クタバリそこないの自分に、どんな映画が創れるか、楽しみじゃない。

で、「まだまだあきらめない。粘って粘って、粘るだけしか武器はないのだから…」

という思いを抱き続けた友人「えんとこ」の遠藤滋のように、映画創りに、しがみつくようにして生き続けるのだ。

“映画『大好き』を、
「いい映画だね」
「すばらしい監督さんですね」
で終わらせるのはもったいないなあ…。

『大好き』は、
閉じていこうとする社会を開いていく可能性を、
「人間する」ことを思い出させる可能性を
持っている…“

と、友人から「奇跡が起きるかも」の追伸が届いた。

その気になって、
奇跡を起こしたい。

伊勢 真一